

生徒の心を動かす日本情報サイト「くりっくにっぽん」： ほんものと深く出会い自分を振り返る授業に向けて**

Miyuki Chiba, Administrative Deputy Director, The Japan Forum (TJF)
chiba@tjf.or.jp

Madoka Ando, Program Officer, The Japan Forum (TJF)
ando@tjf.or.jp

Yuko Fujimitsu, Japanese Language Advisor, Department of Education, Western Australia
yuko.fujimitsu@education.wa.edu.au

Hiroko Koga, Japanese Language Assistant, Department of Education, Western Australia
(The Japan Foundation Japanese-Language Specialist Dispatch Program 2012-2014)
eruchan_7@yahoo.co.jp

要旨

Creative endeavors to connect students with the real world and real people are starting to give impact in classrooms. By using realia drawn from a wide variety of media, such as newspapers, photography, magazines, books, films, documentaries, and also materials students bring to class, teachers may effectively prompt students' linguistic capabilities and cultural awareness.

Click Nippon, a website produced and operated by the Japan Forum, a public-interest incorporated foundation based in Tokyo is one of such sources that provides a variety of content related to Japan and designed to foster ideas and reflection about the reader themselves, about their cultures, and about the world at large. Two successful practices inspired by its contents have currently taken place in Australia.

キーワード

異文化理解、学校日本語教育支援、内容重視、プロジェクト型学習、つながりの創出

* English title: Click Nippon: A Website that stimulates student's thinking by Meeting Others and Self in Depth

* This paper was presented to the 18th Biennial Conference of the Japanese Studies Association of Australia at the Australian National University from 8th to 11th July 2013 and has been peer-reviewed and appears on the Conference Proceedings website by permission of the author who retains copyright. The paper may be downloaded for fair use under the Copyright Act (1954), its later amendments and other relevant legislation.

1. はじめに

本稿は初等中等レベルの異文化理解教育、学校日本語教育支援に貢献する日本発のウェブサイト「くりっくにつぽん」の概要と、そのコンテンツを活用した内容重視の日本語教育の実践報告である。日本語を学ぶ生徒たちが「ほんもの」と深く出会い自分を振り返る機会を提供することを願う「くりっくにつぽん」のクリエイターとオーストラリア在住の日本語教育専門家によって共同執筆された。論文の前半では、日本情報ウェブサイト「くりっくにつぽん」の理念と内容を解説し、後半では西オーストラリア州の実践例を紹介するとともに内容重視の日本語教育活動デザインにおける「くりっくにつぽん」の役割と可能性について考察する。

2. ウェブサイト「くりっくにつぽん」

2.1. 開設の経緯

日本の民間財団、国際文化フォーラム（The Japan Forum、以下 TJF）は、アジア太平洋地域の国々をはじめとする諸外国の初等中等レベルにおける日本語教育関連事業、日本国内の中等レベルにおける外国語教育関連事業、互いのことばと文化を学ぶ世界の中高校生の交流事業を行っている。日本語教育関連事業としては、日本に暮らす小中高校生の素顔や日常生活の様子を伝える教材や情報誌の制作などを行ってきた。2001年に制作した写真教材「であい：7人の高校生の素顔」では、さまざまな地域、家族構成、趣味、学校の7人の日常生活や生い立ちから夢までを、文章と写真、動画で紹介した。また、2004年から2011年まで日本語教師向けの英文情報誌『Takarabako』を発行し、日本で話題になっていることを事象や事物の面と人物の面から紹介した。

2009年に「くりっくにつぽん」を開設した当初は、『Takarabako』の記事と、誌面では紹介できなかった関連情報や音声を掲載していた。しかし、この情報誌は季刊であることから、「くりっくにつぽん」のコンテンツが増えるのも年に4回程度であり、更新頻度を上げることが課題となった。また、インターネットの発達と技術の飛躍的革新の状況から、音声だけでなく、授業で活用できるような動画のニーズも高まっており。制作を検討する必要がある。そこで、TJF だからこそ発信できる日本情報は何かをあらためて検討し、2012年末に、コンセプトとサイト構成を一新してリニューアルオープンした。それに伴い、情報誌は休刊して日本情報の発信はウェブサイトへ一本化した。

2.2. ねらい

もともと TJF は、日本についての知識を増やすためだけのものとは一線を画す、「ほんもの」にこだわった日本情報発信に取り組んできた。現在に至るまで、その柱となっているのが「同世代の視点」と「多面的・多角的な視点」である。

生徒にとって、自分自身や自分の文化にひきつけて比較したり考察を深めたりしやすいのは、年齢の近い人々の生活の様子やものの考え方であるといっていよう。社会事象についても、同年代の人々の関心事として提示することで、身近なできごととして

受け止めやすくなる。それも、架空の「佐々木さん」や「鈴木さん」ではなく、実在の人物を介することにより、日本との出会いは「ほんもの」の体験となる。

また、客観的なマクロの視点と主観的なミクロの視点を組み合わせて事象の多面性を提示したり、歴史的経緯や社会的、地理的背景、世界とのつながりなど複数の観点から多角的に情報を提供したりすることで、日本とそこで暮らす人々の多様性に光を当て、ステレオタイプに陥りがちな日本のイメージへのチャレンジを重ねてきた。

リニューアルした「くりっくにっぽん」は、このような姿勢を全面的に引き継ぎながら、「人の内面」に迫るインタビュー記事を主要コンテンツに据えた。日本のポップカルチャーなど「事象／モノ」についての情報はインターネットで検索すればすぐに入手できるようになったが、日本で暮らす人たちが何を感じ考えているかという「人」の内面についての情報は検索ではなかなか出てこない。入手できたとしても日本語で書かれたものが多く、海外の若い読者向けにはまだ豊富とはいえない。また、近年の SNS サービスは、国境を超えすぐさま人と人をつなぐようになった。しかし、人の心の動きや、悩みなど内面については、少しの交流ではなかなか知ることができない。一方で、人の心を動かすのは、人の内面を知り、理解したときだと考えたからである。

それと同時に、「くりっくにっぽん」以前から取り組んできた文化事象の紹介という性格を引き継いだコーナーも設け、年中行事や異文化として外から見た日本について、実在する中高校生によるレポートを掲載することにした。

インターネット・メディアとなり、誰でも検索して訪れる可能性がある以上、それ以前の写真教材「であい」や情報誌『Takarabako』と異なり、教育現場での活用を主眼にするというよりは一般読者向けの読み物という性質が加わったのも新しい点である。とはいえ、教師向けのコーナーを設け、リニューアル前の教師向けの記事も引き続き読めるようにアーカイブに収めた。これらすべての記事は多言語（日本語、英語、中国語、韓国語）で提供することにした。

こうして、インターネット上ではあるが、日本に暮らすさまざまな実在の人物に出会い、多様な文化や価値観にふれて思考が深まること、また「日本」や「日本で暮らす人」との出会いを通じて読者が自分自身や自文化、さらには世界について考えるようになることをねらいとした新たな「くりっくにっぽん」が誕生した。

2.3. 構成

「くりっくにっぽん」は、日本についての情報を発信する 3 つの主要コーナーと、教師向けの情報をまとめた先生コーナーから構成されている。

「My Way Your Way」コーナーは、いま日本で話題になっていることをトピックにして、それに関わる人たちの考えや生き方を紹介するインタビュー記事を掲載している。記事に登場する人たちの率直な語りに引き込まれ、読者自身も自分の生き方を振り返る。

「My Way Your Way」というコーナー名には、「いろいろな生き方があるが自分はどうなんだろう」と考えを刺激するコーナーになればという思いをこめている。取り上げるトピックや人を選ぶ際には、ステレオタイプに陥らず多角的な視点を提供することがで

きるかどうか、たとえば時代の変遷、地理的な広がり、社会への影響などに読者が関心を広げて考察したり議論したりするきっかけを提供できるかどうかを考慮している。

「1/365 (365 分の 1)」コーナーでは、日本の高校生と大学生が日本の伝統行事や学校行事、新しい行事をどのように過ごしているのかをレポートしている。年中行事は日本語の授業でよく取り上げられるため、海外の日本語教師から、取り上げてほしいテーマとしてよく要望が上がるものである。このコーナーは、その声にも応えたものでもあるが、教科書や辞典にあるような解説ではなく、いま日本で人々がどのように行事を過ごすのか、若者の目線から情報を提供している。リアルな日本の暮らしが浮かび上がると同時に、個人差、各家庭の差、地域差など、多様性もまた表出する。

「何コレ？マジコレ!？」コーナーでは、日本に旅行や留学でやってきた中学生、高校生、大学生がびっくりしたり感動したりおもしろいと思ったシーンを写真と説明文で紹介している。日本に暮らす読者からすれば見慣れたもので何が面白かったのか一見分からないこともあるが、日本の読者にとっても、海外の読者にとっても、ほかの人がおもしろいと思ったシーンを知ることは、なぜ人がそれをおもしろいと思ったのか考えを深めるきっかけになる。また、自分の身のまわりの事象を、それを見慣れていない人の視線で見るとは様々な気づきをもたらす。このコーナーは、日本文化紹介は日本に暮らす日本人がするものという固定観念へのささやかなチャレンジでもある。

「先生コーナー」は、「くりっくにっぽん」のコンテンツを日本語や日本理解の授業で活用するためのヒントを提供する。「めいきんぐ授業」のセクションでは、日本語教師によるエッセーを掲載している。日本語の力を伸ばすことだけを目的にするのではなく、日本語を学ぶことを通じて、21 世紀を生きる力を生徒に身につけてほしいと願い、実践している教師がどのように授業をつくっていているのか、そのプロセスを知ることができる。「くりっくにっぽん活用術」ではコンテンツを活用した授業案を掲載している。「アーカイブ」には 2009 年から 2011 年まで「くりっくにっぽん」サイトに掲載した記事を PDF で提供している。

2.4. 主要コーナーの内容

2.4.1. 「My Way Your Way」

「My Way Your Way」コーナーではこれまでに、特集として「ファッションで自己表現」「ことばの力」「デコで気持ちを表す」「アイドルは好きですか？」などを取り上げている。

「ファッションで自己表現」では、原宿を「白塗り（顔を白く塗って独特のファッションをする）」で歩く 20 代の津野氏さん、都内の高校に通う高校生 4 人、なんちゃって制服（制服に見える洋服）を売り出す会社社長の相浦孝行さんが登場し、ファッションについて考えていることや関心をもっていることなどを語っている。ここからは、制服ひとつとっても人によって考えが違ふこと、ファッションについて同じように考えていても表出するものは異なることが浮かび上がってくる。

「ことばの力」では、福島在住の詩人・和合亮一さん、福島在住で詩を書くことが好きな中学生・良太さん、短歌や小説を書くのが好きな高校生・万象さんの3名が、それぞれ、日ごろどのようにことばと向き合い、ことばの力をどう捉えているのかを語っている。この特集では、特に私たちの事業対象者でもある言語教育関係者に届けたいと思って企画した。内容を紹介したい。

2011年3月11日、東日本大震災が起き、大きな津波が海岸沿いの町をのみこんだ。福島では原子力発電所で事故が発生。避難する人、残る人、状況が緊迫する中、和合良一さんは「ことばを失っていた」と語る。自分はこれまでことばと向き合ってきたが、今まで自分がやってきたことは何だったのだろうかという無力感と喪失感のなかで、原発事故発生から6日目にツイッターでこうつぶやいた。

放射能が降っています。静かな夜です。

この一行をきっかけに、和合さんがことばを取り戻していく姿が、インタビュー記事「未来をひらく」の中で明かされている。和合さんは、ときには2時間で40~50の詩を発していたという。次々と発信される詩からは、恐怖、怒り、孤独、無力感、福島や人への愛が心に迫り、多くの人々の心を捉えた。

インタビュー掲載にあたり、取材するなかで、この詩を震災当時にツイッターで読んでいたという福島在住の人がそのときを振り返って「あまりにも悲惨な状況に私たちは自分の心を表現することばが見つからなかったんです。和合さんが、私たちの気持ちをことばにしてくれた、ほしかったのはこのことばだったって思いました。これで私たちがどれほど救われたかわかりません」と語ったことが忘れられない。

もうひとつのインタビュー記事「詩で心を伝える」で、インタビューを受けた良太さんは、震災後1年半が経ったときにふるさとの現状を直視し「福島へ」という詩を書いたときのことを語る。被災して傷ついたのは人だけでなく、建物や土地もだと訴え、愛しいふるさとへの思いをラブレターとして表現した詩だった。この良太さんの詩や、ほかの子どもたちが書いた詩を聞いて涙する大人がたくさんいる。その理由を、和合さんはこう語った。「この震災を体で感じて、一言一言、大事に自分の思いをつづっているから、聞いた人は感動するんです。果たして私たちが話をするとき、あるいは何か思いを伝えるときに、そこまでことばを大事に思っている使っているのかどうか。人を励ますのもことばであれば、人を追い込むのもことば、人を見放すのもことばです」。

そんな「ことばの力」を改めて見つめたいと思い企画したこれらのインタビューは、読者からの反響を呼び、海外の日本語教育現場でも活用された。¹ことばがもつ力やふるさとへの思いは言語や文化の違いを超えて共通のものであり、読者が自らにひきつけて読み、自分自身を振り返ることのできる、「くりっくにっぽん」らしいテーマだったといえる。

¹ オーストラリアで日本語教育に特集「ことばの力」を活用した事例は後掲の西オーストラリア州における実践例と Nishimura-Parke 論文を参照のこと。

2.4.2. 「1/365 (365分の1)」

現在、高校生と大学生計 8 人がレポーターとなり、伝統行事、学校行事、家族の行事などをどう過ごしているかをレポートしている。リアルなレポートからは、海外だけでなく日本国内でも知られていないような今の高校生、大学生の行事の過ごし方がわかる。例えば、「バレンタインデー」は日本では女性が好きな男性やお世話になっている男性にチョコレートを贈るものとされているが、今の若い人たちの間では女友だちに贈る「友チョコ」が主流だと複数のレポーターが書いている。また、沖縄の高校生によるお盆の過ごし方のレポートには、沖縄独特な先祖のまつり方が書かれていて、地域差がわかる。さらに、「ひな祭り」は 3 人からレポートが寄せられているが、7 段飾りの雛人形もあれば、ケース入りの雛人形や手作りの雛人形まである。こうした個人差はあっても、ひな祭りに寄せる思いは同じであることがわかる。

2.4.3. 「何コレ? マジコレ!？」

アメリカの高校生から寄せられた、ある店の案内板の写真。何の変哲もないものだが、その高校生はその中の「Western Food」に驚いて撮影した。「Western Food」=西洋の食事=洋食という食べ物のカテゴリーがあって、西洋で暮らしている自分は、知らないうちに毎日「洋食」というジャンルの食べ物を食べていたことへの驚きである。なぜ驚いたのか、その背景を考えると、さまざまな文化の考察につながっていく。

3. 日本語教育等での活用

3.1. 内容重視の日本語教育のリソースとして

「くりっくにっぽん」は、TJF がそれ以前に日本語教育関連事業において開発してきた写真教材「であい」や情報誌『Takarabako』とは異なり、教育現場で活用されることを主眼に制作しているわけではない。インターネット・メディアというその特性上、広く一般の読者に向けて日本についての情報を発信している。

しかし、TJF の発信するコンテンツの特長である、読者が自分自身や自分の文化について振り返り視野を広げるきっかけを随所に埋め込む手法や、ある国や地域の人々の暮らしぶりについてさまざまな角度から伝えることでステレオタイプを助長しない姿勢は、紙ではなくウェブサイトというより自由度の高い場を得たことで、ますます強化されている。後掲の授業実践では、生徒の問題意識を喚起して主体的な学びを促したり、議論を通じて思考力を高めたり、コミュニケーション能力を養ったりするための素材として活用されている。また、「くりっくにっぽん」のコンテンツを日本語や日本理解の授業で活用するためのヒントは、サイト内に設けられた「先生コーナー」の「くりっくにっぽん活用術」²で提供されており、オーストラリア ニューサウスウェールズ 州の 実践例もそこに掲載されている。

² <http://www.tjf.or.jp/clicknippon/ja/activity/>

3.2. 西オーストラリア州における「くりっくにつぼん」活用実践

本稿では、「くりっくにつぼん」ウェブサイトを活用した西オーストラリア州の実践として、パース市内の公立高校で行われたプロジェクト型学習「コアプロジェクト」と教育省の主催による「ご当時弁当エキスポ」ワークショップの実践を紹介する。

前者の「コアプロジェクト」は、「くりっくにつぼん」の **My Way Your Way** の特集「ことばの力」に啓発されてデザインされたものである³。また、授業のキー・リソースの一つとして Vol.2 に掲載された良太さんの『福島へ』という詩と朗読ビデオが活用されている。

後者の「ご当地弁当エキスポ」ワークショップは、内容重視の日本語教育実践の試みだが、「くりっくにつぼん」の「先生コーナー」のアーカイブからアクセスできるコンテンツから「お弁当一食べる楽しみ、伝わる温もりー」と「ご当地ブーム：ご当地大好き」の内容をもとに、さまざまな学習活動がデザインされた。

3.2.1. 西オーストラリア州における学校日本語教育支援の文脈

はじめに、実践の背景となった西オーストラリア州の学校日本語教育支援の文脈について、簡単に記しておく。

西オーストラリア州教育省は、オーストラリアの国策として 2009 年 1 月に施行された「学校教育におけるアジア語・アジア学習推進計画」（NALSSP: National Asian Languages and Studies in Schools Program）⁴を政策的根拠とし、州の学校日本語教育現場に関わる多様な支援を継続している。2010 年には国際交流基金シドニー日本文化センターの協力により日本語教育アドバイザーポジションの現地化、2012 年には同基金派遣の日本語指導助手の受け入れが実現した。

州教育省の日本語教育支援の担い手となったアドバイザーと指導助手は、国レベルの言語教育政策の指針である **Intercultural Language Teaching and Learning** の考え方と学校日本語教育現場をつなぐ試みとして、生徒に日本語を使う環境と文脈を与え、学習内容重視、プロセス重視のプロジェクト型学習活動をデザインし、その実践を積み重ねてきた。学習活動のデザインにあたって、国際文化フォーラムの提供する「くりっくにつぼん」ウェブサイトの理念に多くの示唆を得ており、学習内容として、そのコンテンツを活用している。

3.2.2. 実践例 1：「コアプロジェクト」概要

以下は「くりっくにつぼん」ウェブサイトを活用した「コアプロジェクト」の企画、実践を担った古閑紘子（国際交流基金派遣日本語指導助手）による報告である。

³ オーストラリアで日本語教育に特集「ことばの力」を活用した事例はニューサウスウェールズ州にもある。Nishimura-Parke 論文を参照のこと。

⁴ 同政策についてはオーストラリア政府による下記公式サイトに詳しい情報がある。
<http://www.deewr.gov.au/schooling/nalssp/Pages/default.aspx>

東日本大震災から2年が経過した2013年3月11日の週に、震災でどれだけの方が犠牲になり、どのような問題が起きたのかについての情報を日本語クラスで共有した。加えて、震災がもたらした影響・問題は現在も続いていることを伝え、生徒に「今、私たちにどんなことができると思うか」と問いかけたところ、「千羽鶴を作って被災地に送る」「募金を集める」「おもしろいビデオを作って、被災地の方々に笑顔になってもらう」等のアイデアが出された。その際、近年日本ではコアアラが受験合格祈願のお守りのキャラクターとして一部で人気を集めているということを紹介したところ、生徒から「折り紙でコアアラを作って被災地に送ろう！」という声があがり、プロジェクトとして動き出すこととなった。同時に、折り紙のコアラは千羽鶴にちなんで1000個作り、日本語でのメッセージと歌のビデオを添えて被災地に送ることが決まり、プロジェクトは「コアアラプロジェクト」と名付けられた。

プロジェクトを突き動かす原動力となったのは、第一回目の授業であった。ドキュメンタリーを観た後に自分の気持ちと向き合い、ワークシートに記入するという内容だったが、放射能の問題が続く中で故郷から離れた暮らしを余儀なくされた子どもたちの姿を見て、「子どもたちはこんな痛みを受けるべきじゃない！」と怒りや悲しみの感情を抱いた生徒、「もし自分だったら…」と被災者の立場に立って考えた生徒、「何かしたいけれど、自分の年齢と日本との距離を考えると難しい」と無力感を覚えた生徒、「絶対に東北のために何かしたい」「私が世界を変えられるかもしれない」という気持ちに駆られた生徒など、この時点で東日本大震災は生徒たちにとって単なる過去の出来事の一つではなくなっていた。また、「同じ星の一人の人間として、痛みを分かち合いたい」という生徒の言葉からは、生徒が日本語の教室を飛び出し、社会、世界と自分自身との間につながりを見出していることが窺えた。

コアアラプロジェクトに取り組んだ生徒はパース市内の公立高校で日本語を履修中の主に8年生から10年生までの約90名だが、11・12年生の約10名も時間の限りプロジェクトに取り組んでいる。プロジェクトが本格的に始まったのは2013年5月上旬で、9月下旬には予定されている活動が全て終了するよう計画された⁵。

学校日本語教育の現場で扱うということを踏まえ以下の点をプロジェクトの柱とした。

- 東日本大震災を見つめ直し、同じ地球上で時間を共にしている一人として、被災地で現在も続いているさまざまな問題について深く考える。
- 本物の人・社会、本物のことばと深く出会う中で、自分自身や自分のことばについて振り返る。また、その経験を通してことばの力を感じ、その力を発揮する。
- オーストラリアと日本（福島）の生徒の間につながり、交流を育むきっかけを作る。

プロジェクト全体の流れは以下のとおりである。

⁵ プロジェクトで予定していた授業が9月末にすべて終了したあと、生徒が作った1000の折紙コアラと、日本語で書いたメッセージ、歌のビデオは、福島あったか交流大使のストックトン亜紀子さんの手によりオーストラリアから福島まで届けられた。そして、2012年10月11日に福島の学校でおこなわれたBreathによるチャリティーコンサートの際、ストックトン亜紀子さんとBreathのみなさんから福島の子どもたちにコアラやメッセージが手渡された。

授業項目	内容	対象
“Children of the Tsunami” ⁶ & Watashi no kimochi ⁷	“Children of the Tsunami”というドキュメンタリーを観て、震災や福島の実状に対する自分の気持ち・考えと向き合う。	8～12年生
Origami Koala Making ⁸	コアラの折り紙の作り方を覚える。	8～12年生
“LIGHT UP NIPPON” ⁹	震災後に被災地を元気づけるためのプロジェクトを成し遂げた男性のドキュメンタリーを観て、“心の支援”について考える。	11,12年生
My beautiful hometown, Fukushima & Ganbappe, Fukushima	福島出身の女性と震災時に福島でALTをしていた女性をゲストスピーカーに迎え、福島や震災時の状況について学ぶ。	希望者 (8～11年生)
The power of words (Message for Fukushima)	自身の経験を振り返ったり、福島在住の中学生が書いた詩 ¹⁰ を読んだりする中で、ことばの力について考える。それを踏まえた上で、福島に届けるメッセージを日本語で書く。	8～10年生
Song for Fukushima (“I love you & I need you, Fukushima” ¹¹)	猪苗代湖ズの歌”I love you & I need you ふくしま”を使って歌のビデオを作る。	8～12年生
A Thousand Origami Koalas	折り紙で作った1000のコアラを画用紙に貼って、福島の形を作る。	8～12年生

3.2.3. 実践者による「コアラプロジェクト」のふりかえり

プロジェクトを進める中で困難を感じた場面もいくつかあった。中でも最も難しさを感じたのは、生徒に自分自身の経験や考えについての振り返りを促し、そこから考えを

⁶ Children of the Tsunami(2012)©Renegade Pictures,UK は被災した福島の子どもの声を通して震災後の福島を伝えているドキュメンタリー。2012年にBBCで放送された。

⁷ Watashi no kimochi の授業では、開発教育協会 (DEAR) がウェブ (www.dear.or.jp/ge/download.html) で無料公開している教材『グローバル・エクスプレス』のサンプル版第13号「東日本大震災 part1」に掲載されているアクティビティー例「わたしの気持ち」を参考にワークシートを作成し、生徒が東日本大震災に対してどのような感情を抱いているかについて生徒自身の振り返りを促した。

⁸ コアラの折り紙作成にあたっては、無料情報サイト「おりがみくらぶ」 (<http://www.origami-club.com>) を参照した。

⁹ LIGHT UP NIPPON(2012)©2012 LIGHT UP NIPPON PARTNERS は、震災後に開催が中止された隅田川花火大会の花火を東北各地で同時に上げるというプロジェクトを実行した高田佳岳さんを追ったドキュメンタリー映画。

¹⁰ くりっくにつぼんのコンテンツである My Way Your Way の Vol.2 に掲載されている良太さんの『福島へ』という詩と、朗読ビデオ (<http://www.tjf.or.jp/clicknippon/ja/mywayyourway/02/post-3.php>) を扱った。

¹¹ I love you & I need you ふくしま(2011)は、震災後に猪苗代湖ズがリリースした楽曲である。

深められるよう導くという場面である。生徒は言語のクラスで自分について振り返るといふ作業に慣れていなかったため、うまく経験や考え、感情を引き出すには、ただ質問を投げかけるというだけでは機能しなかった。そこで、生徒の振り返りを促す前に、まずは教師自身の経験について話したり、気づきや振り返りを促す映像や情報を探して授業内で共有したりして、どうにか振り返りの作業がスムーズに進むよう試行錯誤した。それによって十分に振り返りが促せたかどうかについては、未だに課題が残っている状態ではあるが、自分について振り返り、それを教室内で共有するという活動は、教師と生徒、そして生徒同士が互いについて深く知り合う貴重な機会をもたらしてくれた。

プロジェクトでおこなった活動はどれもいわゆる成績評価の対象にはならず、すべて生徒の自主性に任されていた。それにもかかわらず、授業時間以外でも休み時間や放課後の時間、家庭での時間を使って日本語でのメッセージ作成や 1000 のコアラ作成に取り組む生徒が多く見られた。そのような生徒の姿から、本物の人や社会とつながるといふこと、ことばを生み出す際に伝えたい気持ちがあり、伝えたい相手がいるということが、ことばの教育において非常に重要であるといふことを改めて認識した。

また、日本語でのメッセージに関しては、まだ日本語学習を始めてから間もない生徒や日本語学習に難しさを感じていた生徒でさえも、これまでの学習内容や辞書を駆使して、自分の想いをメッセージに込めようと力を尽くし、ことばの力を見事に発揮することができていた。この様子からは、生徒が無数の可能性を秘めていること、また、教師がその可能性を信じるかどうかで、生徒が力を発揮できる場は狭くも広くもなりうるということがわかった。

今後の展望として、オーストラリアと福島の学校間で以下のような活動が生まれることを期待している。

- 手紙、写真、ビデオなどでの継続的な文化・言語交流。（互いに学習言語を使って、自分の学校やまち、国、言語について紹介しあう、等）
- 福島での問題についてより深く学び、広い視野をもって考える。また、その考えを共有する。
- Video Conference などによる、リアルタイムでの交流

1 つ目の活動については、手紙やビデオでの交流だけでなく、プロジェクト内の授業でも扱っている「詩」といふ表現方法に再び焦点をあて、日本語（または英語）で詩を書くことに挑戦したり、書いた詩を詩集にして学校間で送りあったりするなど、詩を通しての交流という方法も考えられる。今後は双方向での継続的な交流を図りながら、プロジェクトをどのように発展させられるか、その可能性を探って行きたい。



写真1：生徒が書いたメッセージ



写真2：折り紙コアラ



写真3：1000のコアラ

3.3. 実践例 2 : 「ご当地弁当エキスポ」 ワークショップ

3.3.1. 「ご当地弁当エキスポ」とは

「ご当地弁当エキスポ」とは、生徒が自分たちの住むコミュニティの魅力を伝える弁当のポスターを作成し、エキスポ会場のブースで自慢の創作弁当のアイデアを紹介するプロジェクト。西オーストラリア州教育省日本語アドバイザーを中心とするチームによって企画された教師と生徒がともに参加するワークショップのプログラムの一つである。企画者チームは、くりっくにつぼんウェブサイトの「先生コーナー」からアクセスできる英文情報誌「Takarabako」の弁当特集とご当地ブーム特集の内容をキー・リソースとして選定し、1日のワークショップのプログラムとして一連の学習活動をデザインした。対象は主としてプライマリースクールの高学年からジュニアセカンダリーの生徒たちである。

3.3.2. ワークショップの目的と内容設計の指針

西オーストラリア州教育省の主催する日本語教育ワークショップは、生徒に日本語を使う環境、文脈を与え、創造性と表現力を発揮させる場であると同時に、教師にとっては新しい外国語教育のアプローチを実践的に学ぶ研修の場を提供することを目的としている。こうした目的に沿うものになるよう、ワークショップの内容設計は入念に行う必要があった。以下に、企画チームが「ご当地弁当エキスポ」の内容設計にあたって特に留意した点をまとめた。

- ①文化間コミュニケーション能力を育てる特定の課題の達成を目標として、バックワードデザインの考え方で授業計画を立てること
- ②学習活動は、生徒中心で且つ協働力を育てるグループワークを中心にする
- ③インプット活動に使うリソースは生徒の好奇心を掻き立てるオーセンティックなものであること
- ④インプット活動は受身的な学習でなく、インタラクティブな参加型の活動にすること
- ⑤生徒が日本語を使いたくなる文脈を作り出す、楽しいシナリオを用意すること
- ⑥生徒のパフォーマンスを引き出す工夫として、演劇的な手法を活用すること
- ⑦アセスメントとしてのアウトプット活動は、生徒が協働学習の成果と創造性を発揮できるものにする
- ⑧毎回、参加生徒と教師それぞれと、活動の振り返りの時間を持ち、一人一人のフィードバックの内容を記録し次のワークショップデザインに反映させること
- ⑨ワークショップの講師およびアシスタント講師陣は、専門分野や経験、男女や年齢のバランス、日本語非母語話者と日本語母語話者のバランスを考慮した多様なスキルと視点が反映されるメンバー構成にすること（異業種の専門家の視点や、現地の生徒の生活をよく知る教育家の視点を反映させることは特に重要である）
- ⑩ワークショップに関わるスタッフ全員と企画段階からリソースやアイデアを共有し、プログラムづくりから振り返りまで協働作業で行うこと

3.3.3. ワークショップのテーマについて

「くりっくにっぽん」のコンテンツとして取り上げられた日本の弁当文化は、家族の愛情、食育、衛生、地産地消、環境、地理、アートなど多くの分野に広がりをもつため、内容重視の日本語学習のテーマとしてふさわしい（図1参照）。また、それを「ご当地」コンセプトの学習と組み合わせることで、生徒自身が自分のコミュニティの魅力を再発見し、日本語で発信する機会をつくろうと考えたことが、「ご当地弁当エキスポ」のデザインにつながった。

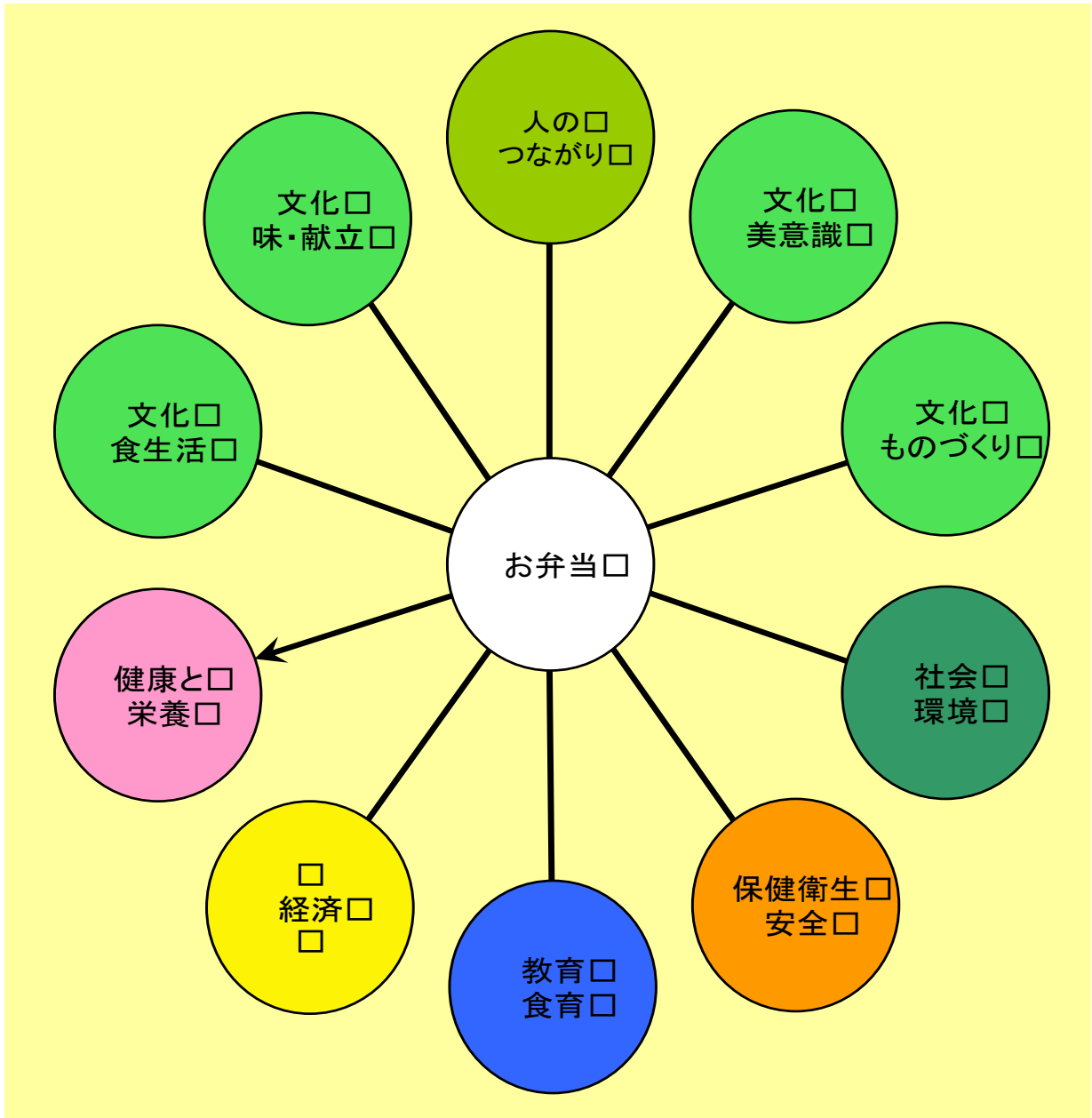


図1 「お弁当」をめぐる学習テーマの広がり（作図：中野佳代子）

よう、随所にタスク設計上の工夫がされている。生徒に英語で提供されるシナリオは以下の通り。

Scenario:

You and your family are participating in ‘We Love Our Hometown: Family Obento Expo’ to promote your country through a creative design of obento. You are encouraged to include some local specialties in your obento design. At the Expo site, the judges will walk from booth to booth. Each family will give a presentation of their own obento and answer the questions from the judges. Every member of your ‘family’ needs to perform well to impress the judges.

Procedure:

Step 1: Form a group and create your ‘family’. Decide which character you will play.

Step 2: Use the bento planner template and design your family's healthy and colourful bento menu as a group.

Step 3: Draw a design of bento (Use the A3 paper.) Make your obento poster colourful and presentable. Label the pictures in Japanese.

Step 4: Prepare your role and rehearse the Expo scene.

Step 5: Do a rehearsal and get your sensei’s feedback.

Step 6: Perform the scene of presentation and Q&A.

プレゼンテーションはポスターを使ったエキスポ形式で、ファシリテーターや現地教師、続いて生徒自身が会場を歩き回って各ブースを訪ね、弁当のアイデアをめぐって日本語でやりとりを行う。グループのメンバー全員に日本語の質問が投げかけられる。質問に対する回答、弁当のデザインとともにグループのメンバーのプレゼン力、ホスピタリティーも審査対象で、来訪者は合格と認めれば署名を残す。生徒は呼び込みにも熱心になり（写真5）、できるだけ多くの来訪者の署名を獲得することを競う。発表のあとには、生徒、教師それぞれが活動の成果を振り返り、共有する時間を持つ。



写真5 創作弁当を売り込む生徒たち。2013年4月に西オーストラリア州パース市の兵庫文化交流センターで行われた「ご当地弁当エキスポ」で。（撮影：古閑紘子）

3.3.5. 「ご当地弁当エキスポ」の活動の成果とふりかえり

2013年4月から6月にかけて、州都パースのほか、キンバリー地区やサウスウエスト地区においても「ご当地弁当エキスポ」ワークショップを実施したが、300名を超える参加者があった。ワークショップは複数の学校から選抜された生徒が教師とともに参加する形態であるため、学校、学年を超えて、それぞれの地域の生徒と生徒、教師と教師のつながりをつくる場ともなっている。

この活動を通じて、それぞれの地域で生徒が大切に思っている文化や自然、地元の豊かな産物を盛り込んだ多くの魅力的な「ご当地弁当」のデザインが産み出されてきたが、とりわけ興味深いものとして、食材の選択に先住民の食文化が反映されたお弁当があった。キンバリー地区のワークショップでのことで、ここでは先住民の文化を継承する生徒たちが参加していたためである。「ご当地弁当エキスポ」は、お弁当のデザインを通じて、異なる文化背景をもった参加者自身が、自分の文化を振り返り、また、多様な文化を背景とする他者に出会う機会をつくり出す活動である。ファシリテーターにとって毎回のワークショップが生徒の文化との出会い、発見、学びの機会であることは言うまでもない。

オーストラリアのナショナルカリキュラムでは、先住民の視点、オーストラリアの属するアジアの視点、さらに持続可能な地球の環境づくりの視点を育てることが、教科横断的な重点事項として挙げられている¹²。西オーストラリア州では、州教育省の日本語教育支援事業において教科横断的な視点からの日本語授業づくりを探求する場を持ち続けたいと考えている。持続可能な地球の環境づくりのために、日本語教育分野からどう貢献できるのかという問いが、日本語教育アドバイザーを中心とするチームによる教育活動デザインの根底にある。

4. おわりに：教育現場とつながる「くりっくにつぼん」の役割と可能性

本稿で紹介した西オーストラリア州での教育実践においては、活動のデザインにあたって、そのキー・リソースとして「くりっくにつぼん」ウェブサイトの活用が重要な役割を果たした。

教育活動をデザインする立場から述べるなら、内容重視の活動では、まず新鮮で良質の素材の入手、仕込みが欠かせない。授業という料理の作り手である教師にとって、優れた素材、すなわち質の高い情報にアクセスできるかどうかは、料理の出来に関わるたいへん重要なポイントである。さらに、海外の学校日本語教育現場の教師には、その情報が、日本語だけでなく生徒の母語を含む複言語で提供されていることが必要である。また、教科横断的な授業のネタとは、いわゆる流行の話題の提供にとどまるものでなく、歴史的経緯や社会的、地理的背景、世界とのつながりなど複数の観点から多角的にとりあげる内容でなければならないだろう。そして、生徒の心を動かし内省に導くような授業の流れを作るには、生徒が「ほんもの」と深く「出会う」ことが大切なのは、多くの教師が経験として知っていることではないだろうか。「くりっくにつぼん」の編集方針

¹² <http://www.australiancurriculum.edu.au/CrossCurriculumPriorities>

と構成はこうした教育活動の設計者のニーズと合致していた。そのため、内容重視の日本語教育に関心をもつ実践者にとってインスピレーションとなったのである。

生徒の心を動かし、「ほんもの」と深く出会い、自分を振り返ることにつながる授業づくりに関心がある教師は世界中にいるだろう。今後は、日本語教育に限らず、社会科など他教科でのプロジェクト型学習や異文化理解教育、あるいは日本の外国語教育現場において日本で暮らす自分について発信するといった取り組みへの活用事例が増えることが期待される。

参考文献・ウェブサイト

1. 西オーストラリア州における「コアプロジェクト」実践で参考にされたもの
“折り紙・コアラ”. おりがみくらぶ.

〈[http://www.origami-club.com/animal/animal\(small\)/koala/index.html](http://www.origami-club.com/animal/animal(small)/koala/index.html)〉 (参照 2013/3/16)

“教材ダウンロード (無料)”. 開発教育協会.

〈<http://www.dear.or.jp/ge/download.html>〉 (参照 2013/3/27)

“詩で心を伝える | My Way Your Way”. 公益財団法人国際文化フォーラム.

〈<http://www.tjf.or.jp/clicknippon/ja/mywayyourway/02/post-3.php>〉 (参照 2013/4/1)

“BBC Two – Children of the Tsunami”. BBC.

〈<http://www.bbc.co.uk/programmes/b01cx9gj>〉, (参照 2013/3/27)

“猪苗代湖ズ『I love you & I need you ふくしま』”. 猪苗代湖ズ

〈<http://www.inawashirokos.jp/>〉, (参照 2013/4/10)

“LIGHT UP NIPPON”. LIGHT UP NIPPON.

〈<http://lightupnippon.jp>〉, (参照 2013/4/10)

2. 西オーストラリア州における「ご当地弁当エクスポ」実践で参考にされたもの
公益財団法人国際文化フォーラム「くりっくにっぽん」「先生コーナー」アーカイブ

(<http://www.tjf.or.jp/clicknippon/ja/archive/>) から

お弁当一食べる楽しみ、伝わる温もり

(http://www.tjf.or.jp/clicknippon/ja/archive/docs/TB28_J.pdf)

Bento: Packaging Good Food and Human Warmth

(http://www.tjf.or.jp/clicknippon/ja/archive/docs/TB28_E.pdf)

ご当地ブーム：ご当地大好き

(http://www.tjf.or.jp/clicknippon/ja/archive/docs/TB22_J.pdf)

Go-Tochi Boom: We Love Local

(http://www.tjf.or.jp/clicknippon/ja/archive/docs/TB22_E.pdf)

著者

千葉美由紀は公益財団法人国際文化フォーラムで、「くりっくにっぽん」ウェブサイトの企画、取材、記事作成、編集などを行っている。2004～2011年に発行し英語圏の小

中高校の日本語教師に無料で配布していた英文情報誌『Takarabako』の記事作成、編集も行っていた。

安藤まどかは公益財団法人国際文化フォーラムで、「くりっくにっぽん」ウェブサイトの企画、取材、記事作成、編集などを行うほか、マンガをテーマにした日米の高校生交流プログラムを担当している。

藤光由子は 2007 年より西オーストラリア州教育省の日本語教育アドバイザーを務める。学習活動のデザインやワークショップの企画、ファシリテーション、リソース開発、メンタリング、コンサルティング業務を通じ、学校日本語教育現場の支援に関わっている。

古閑紘子は国際交流基金の派遣プログラム（2012-2014）を通して、西オーストラリア州で活動している日本語指導助手である。現在は 2 つの教育機関で日本語アシスタント教師として活動しており、その他にも日本語のワークショップや教師研修の機会にセッションを担当するなどしている。